



皮膚疾患

除去食試験



除去食試験は食物への有害反応だと考えられている食物アレルギーおよび食物不耐性の診断のためのゴールドスタンダードです。^{1,2}いくつかの除去食のオプションがあり、厳格な遵守が必要となります。^{1,2}

食物アレルギーの診断には、血清、皮内、パッチ、唾液、毛髪のアレルギー検査がありますが、犬や猫では信頼性が低いことが研究で明らかになっており、推奨することはできません。^{1,3}

キーメッセージ

- 加水分解食やアミノ酸ベース（成分栄養食）の食事は、特に食歴が不明なペットや、多くの食事性タンパク質に曝露しているペットの除去食として便利です。⁴
 - 加水分解食は、タンパク質を細かく分解したもので、そのタンパク質に感作されているペットでもアレルギー反応を起こしにくくなっています。^{2,5,6}
 - 成分栄養剤は個々のアミノ酸で構成されており、食物有害反応のある子供のための小児・乳児用ミルクに類似しています。感受性の強い動物にも対応できる場合があります。⁴
- 多くの飼い主は、ペットの食物有害反応の可能性に関して、獣医の治療を受ける前に数多くの食事を試すでしょう。これにより新規のタンパク源を見つけることが困難になる可能性があります。⁴ ペットの食歴から新規のタンパク質を特定できた場合、除去食は自家製の食餌か動物用治療食のいずれかになります。^{1,2}
 - 自家製の食餌はしばしば栄養バランスが良くないという研究結果があります。したがって、栄養バランスを確保するために、自家製の食餌は獣医学栄養師が指導する必要があります。¹
 - 「市販の」新規タンパク質食には、ラベルに記載されていない成分が含まれていることがあり、その中には避けるべきタンパク質や成分が含まれている可能性があることが研究により示されています。^{7,8} このリスクを最小限に抑えるために、治療用新規タンパク質食の使用が推奨されます。
- 試験中は除去食以外の食品を与えてはいけません。おやつ、食べ残し、味のついた薬、サプリメント、噛むおもちゃ（ローハイドなど）を与えると、除去食試験がうまくいかないことがあります。¹
- 除去食の実施により、消化器症状では1~4週間、皮膚症状では4~8週間で改善が見られることがあります。しかし、皮膚症状の完全な改善は、最長で12週間後まで認められない場合があります。¹

(次のページに続く)

キーマッセージ (続き)

- 除去食に反応した場合、元の食事を試す必要があります。ペットが反応し、除去食を再開すると再び改善される場合は、食物有害反応が確認されたこととなります。ペットがアレルギーや不耐性を持つ材料を特定するために、材料を1つずつ使用する必要があります。²
- 食物アレルギーや不耐性が確認されたペットの長期管理には、特定されたアレルゲンや材料を避けることが必要です。これが不可能な場合、長期的な管理には通常、加水分解、アミノ酸ベース、または栄養的に完全な新規タンパク質食の継続が必要です。²
- 市販の食餌療法食は、製造時に微量のタンパク質の混入を避けるための専用工程を経ていないため、市販の食餌療法食を用いた成分回避は困難です。^{7,8}

参考文献

1. Mueller, R. S., & Unterer, S. (2018). Adverse food reactions: Pathogenesis, clinical signs, diagnosis and alternatives to elimination diets. *The Veterinary Journal*, 236, 89–95. doi: 10.1016/j.tvjl.2018.04.014
2. Verlinden, A., Hesta, A., Millet, S., & Janssens, G. P. J. (2006). Food allergy in dogs and cats: A review. *Critical Reviews in Food Science and Nutrition*, 46, 259–273. doi:10.1080/10408390591001117
3. Coyner, K., & Schick, A. (2019). Hair and saliva test fails to identify allergies in dogs. *Journal of Small Animal Practice*, 60(2), 121–125. doi: 10.1111/jsap.12952
4. Cave, N. J. (2006). Hydrolyzed protein diets for dogs and cats. *Veterinary Clinics of North America: Small Animal Practice*, 36, 1251–1268.
5. Jackson, H. A., Jackson, M. W., Coblenz, L., & Hammerberg, B. (2003). Evaluation of the clinical and allergen specific serum immunoglobulin E responses to oral challenge with cornstarch, corn, soy and a soy hydrolysate diet in dogs with spontaneous food allergy. *Veterinary Dermatology*, 14, 181–187.
6. Puigdemont, A., Brazis, P., Serra, M., & Fondati, A. (2006). Immunologic responses against hydrolyzed soy protein in dogs with experimentally induced soy hypersensitivity. *American Journal of Veterinary Research*, 67, 484–488.
7. Horvath-Ungerboeck, C., Widmann, K., & Handl, S. (2017). Detection of DNA from undeclared animal species in commercial elimination diets for dogs using PCR. *Veterinary Dermatology*, 28, 373–e86. doi: 10.1111/vde.12431
8. Raditic, D., Remillard, R. L., & Tater, K. C. (2010). ELISA testing for common food antigens in four dry dog foods used in dietary elimination trials. *Journal of Animal Physiology and Animal Nutrition*, 95(1), 90–97. doi: 10.1111/j.1439-0396.2010.01016.x

Purina Institute は、ペットがより長く、より健康的に生きるための、科学に基づく顧客に寄り添った情報を提供することで、ペットの健康に関する議論の最前線に栄養を位置付けることを目指しています。